



はみ が だに  
喰ヶ谷古墳群

1981

松江市教育委員会

## はじめに

松江市の橋南部における人口の増加率には最近めざましいものがありますが、津田地区も年々水田や山林が開発され急激に宅地化されているところのひとつであります。

今回の調査対象となった山林一帯もつい数年前まではうっそうたる松林であったところであります。

将来に向けて私達が狭い土地を有効に利用して生活基盤を築いていく上では、こうした埋蔵文化財が姿を消していくことはある程度止むを得るところではありますが一方では、私達は祖先の人達に対してもっと謙虚な気持ちで対処しなければならないと思います。

そうした意味で、第1号墳の石棺が事業者の方々協力により閉地内の緑地に移築復元されることになったことはまことに喜ばしい限りであります。

本書を読まれる方が、この機会に一人でも多く埋蔵文化財に対する理解を深めてもらうことが出来るならば幸甚に存じます。

昭和56年2月

松江市教育委員会

教育長 内 田 榮

## 凡 例

1. 本書は、豊和産業有限会社が松江市東津田町地内において計画された「つつじヶ丘」団地造成地内に所在する<sup>ほみぞん</sup>壙ヶ谷古墳群について松江市教育委員会が実施した発掘調査の報告である。
2. 発掘調査事業の組織は、下記のとおりである。

委 託 者	豊和産業有限会社	代表取締役	木村勝吉
受 託 者	松江市	松江市長	中村芳二郎
主 体 者	松江市教育委員会	教育長	内田 榮
事 務 局	松江市教育委員会	社会教育課長	石 飛 進
庶務会計	同 上	社会教育課文化係長	足立 千利 (昭和55年10月まで)
	同 上		中西 宏次 (昭和55年11月から)
	同 上	文化係主事	加藤 睦
担 当 者	同 上	文化係主事	岡崎雄二郎
補 助 員	同 上	文化係指導員	佐々木 稔
3. 作業にあたっては下記の方々の協力を得た。(敬称略)

福島 虎市	福島 久子	山崎多恵子	奥原キミエ	長瀬 久子
-------	-------	-------	-------	-------
4. 一部の表土掘削、伐採作業にあたっては事業者である豊和産業有限会社から多大なご協力を得た。記して感謝の意を表する次第である。
5. 本書の編集は、主として岡崎と佐々木が担当した。
6. 突測図面の浄書にあたっては文化係主事<sup>中</sup>尾秀信君の協力を得た。
7. 出土遺構・遺物の検討については県文化課松本岩雄氏、県立博物館村上勇氏から有益な助教示を得た。記して感謝する次第である。

## 目 次

I 調査にいたるいきさつ	1
II 位置と歴史的環境	3
III 各古墳の概要	3
1. 第1号墳	3
2. 第2号墳	12
3. 第3号墳	17
IV 小 結	19

## I 調査にいたるいきさつ

本古墳群の所在がはじめて知られたのは地元西津田町在住で松江市文化財審議会委員の恩田清氏の分布調査によってであった。これは、昭和52年度に松江市教育委員会の津田地区分布調査によって再確認された。<sup>註1</sup>

その後、昭和53年度に至って豊和産業有限会社は、本古墳群を含む山林一帯約 20,500 m<sup>2</sup> を住宅団地に造成する計画を立案し松江市教育委員会に対して事前協議があった。

松江市教育委員会としては事前に発掘調査を実施して価値を判断することが必要であると考えた。そこで昭和55年度において受託事業として発掘調査を実施した。

調査はまず第2号墳と第3号墳について昭和55年6月25日から7月17日までの計14日間を要して行なわれた。又、第1号墳の調査は、団地造成計画の変更にもない生じたもので、発掘調査変更委託契約を昭和55年9月5日に締結したのち昭和55年9月8日から昭和55年9月20日までの計10日間を要して実施した。



第1図 唵ヶ谷古墳群周辺の遺跡分布図

- |            |            |            |             |
|------------|------------|------------|-------------|
| 1. 唵ヶ谷古墳群  | 2. 唵ヶ谷横穴群  | 3. 論田第1号墳  | 4. 論田第2号墳   |
| 5. 論田第3号墳  | 6. 論田横穴群   | 7. 室藤第1号墳  | 8. 室藤第2号墳   |
| 9. 奥金見第2号墳 | 10. 城ノ前古墳群 | 11. 小沢横穴群  | 12. 浅井横穴群   |
| 13. 伝兵衛山古墳 | 14. 高杉第1号墳 | 15. 高杉第2号墳 | 16. 石台遺跡    |
| 17. 南外第1号墳 | 18. 南外第2号墳 | 99. 石屋古墳   | 20. 井ノ奥第1号墳 |
| 21. 魚見塚古墳  |            | 19         |             |

第1表 喰ヶ谷古墳群周辺の遺跡一覧

図面 番号	名 称	所 在 地	区 分	種 類	基 礎	備 考
1	喰ヶ谷第1号墳	東津田町字喰ヶ谷	古 墳	方 墳	7.0×7.0 H=0.95	組み合わせ石棺あり
1	“ 第2号墳	“	?	“	9.0×10.5 H=0.5	方形修法壇の可能性あり
1	“ 第3号墳	“	?	“	10.0×10.0 H=1.0	小型の土壇あり
2	喰ヶ谷横穴群	“	横 穴		3穴以上	崖面に前庭部露出
3	論田第1号墳	西津田町字論田	古 墳	方 墳	8×9 H=0.5	
4	“ 第2号墳	“	“	?	8×10.7 H=1.0	組み合わせ石棺あり
5	“ 第3号墳	“	“	方 墳	9.5×15.0 H=1.0	
6	論田横穴群	“	横 穴		5穴	石棺内蔵、須臾器残存の横穴あり
7	室藤第1号墳	“ 字室藤	古 墳	方 墳	14.5×14.5 H=2.0	
8	“ 第2号墳	“	“	前 方 後方墳	長 20.5 H=1.75	周冊に幅約2m周濠あり。平墳
9	奥金見第2号墳	“ 字奥金見	“	方 墳	13.0×13.0 H=1.5	
10	城ノ前古墳群	“ 字城ノ前	“	“	4基からなる	
11	小沢横穴群	“ 字小沢	横 穴		2～3穴残存 1穴破壊	
12	浅井横穴群	“ 字浅井	“		11穴消滅	
13	伝兵衛山古墳	東津田町 字伝兵衛山	古 墳	方 墳	6.1×8.6 H=1.5	
14	高杉第1号墳	“ 字高杉	“	前 方 後方墳	長 26.5 H=2.0	
15	“ 第2号墳	“	“	方 墳	11.5×11.5 H=2.0	
16	石 台 遺 跡	“ 字石台	遺 物 包含地			縄文、弥生、古式土師器片石器多数
17	南外第1号墳	“ 字南外	古 墳	前 方 後方墳	長 20	葦石あり
18	“ 第2号墳	“	“	方 墳	10.0×10.0 H=1.5	
19	石 屋 古 墳	“ 字石屋	“	方 墳	40×40 H=7.5	国指定史跡 遺出部2カ所あり
20	井ノ奥第1号墳	矢田町井ノ奥	“	“	30×30m	古墳公園として保存
21	魚見塚古墳	朝酌町字魚見塚	“	前 方 後方墳	長 62	

## Ⅱ 位置と歴史的環境

本古墳群は、松江市の中心市街地から東南の方向へおよそ2.75 kmほど離れた小高い丘陵の尾根上に立地する。その所在地番は松江市東津田町字喰ヶ谷 2, 288 - 4、2, 287 - 1 番地である。

この古墳群は3基の方墳からなる。第1号墳は第2号、第3号墳から北へ約50 m 離れ北方へやや下った斜面に単独で立地する。第2号墳と第3号墳は標高48 mほどの比較的平坦な尾根最高所に隣接して所在する。

本古墳群周辺にはほぼ同規模程度の古墳群や横穴群が点在しているが中でも論田古墳群中、第2号墳は昭和54年7月に調査され組み合わせの石棺を主体部とすることが判明している。<sup>註2</sup>又、論田第1号墳（未調査）の東側斜面直下には計5穴から成る論田横穴群が所在する。<sup>註3</sup>この内、第2号穴の玄室には来待石<sup>きまついし</sup>を加工した横口式の組み合わせ石棺が安置されていた。この種の石棺は、島根県内で31例を数え、出雲部に集中しているという特徴をそなえている。又、来待石は、現在の穴道・来待・玉湯地区一帯にしか産出しないものであり、その経済的・政治的特性を考えざるを得ない。同種の石棺は、松江市山代町の孤谷横穴群や矢田町の十王免横穴群<sup>註4</sup>でも知られる。論田第4号穴では玄室内部に須恵器の大甕の破片を敷いた所謂「須恵器屍床」施設を有する。この須恵器屍床は、松江市矢田町の十王免横穴群に類がみられる。この甕片を復元すると器高58 cm、胴部最大径45 cmの大形の水甕となり、胴部に直径1.3 cmほどの円孔を穿っている。当初水甕として使用されていたものが、葬送儀礼に際して胴部穿孔→須恵器屍床へと機能を変えていったことが知られる。

## Ⅲ 各古墳の概要

### 1. 第1号墳

**墳丘の構造** 測量したところ一辺約7 m、高さ平均1.0 mの方形墳と思われた。墳丘の両側はやや凹み周溝があるものと推定された。墳丘表面には円筒埴輪や葺石は見当たらなかった。

調査の結果、古墳は一辺7.0 m、墳裾からの高さ約95 cmを計る方墳で古墳の両側と西側においては自然丘陵を切削加工して深さ25 cm、上端幅0.85～1.45 m、溝底幅0.25～0.35 mほどの溝を穿って墓域を区画している。墳丘は中央部最高所で約50 cmほどあり暗褐色土が盛られている。盛土の下は主体部付近を除いて一様に黒褐色の旧表土が横たわっている。

**遺構** 主体部は墳丘中心部にあり、一種の組み合わせ石棺である。この石棺は主軸を東西方向に向け、磁北に対する角度はN 92.5° Eである。長さは2.4 m、東端の幅は55cm、西端の幅は38cmを計る。高さは床面から側石上面まで平均45cmあり、さらにその上に厚み平均15cmの蓋石がのっている。この蓋石は合計5枚で構成され、その両端の石は共に三角形形状を呈している。南寄りの1枚目と2枚目と3枚目のそれぞれの接目にはその上部に小さな角石を配しすき間を埋めているが粘土などで特に目張りをしたという形跡は見当たらず十分に機能を果たしていない。

側石は、西部においては平坦な1段の石をたてかけているが、東部においては3段積みの小口積みとなっており一貫性がない。

主体部の掘り方については、旧表土である黒褐色土層を掘り込んでいることは分るのだが、棺外周囲においては明確に認められなかった。しかし石棺の南側においては約35cm外方で深さ37cmほど掘り込み側石をすえつけたようである。側石のすえつけに際しては、ことさら掘り方を設けず側石を何回か勢いをつけて落下させることで固定させている。

石材は安山岩質で大海崎系系統と思われる。棺内床面は、中央部が凹み浅いU字型を呈する。

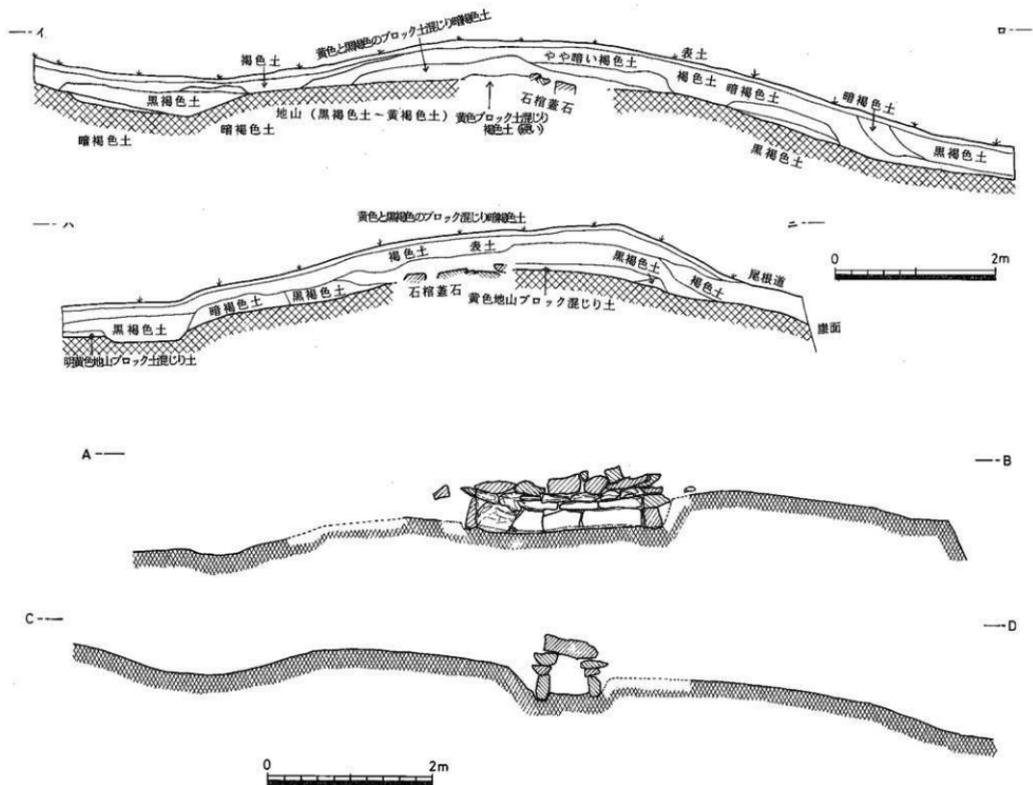
## 遺物

石棺内 1) 須恵器 (第7図1-1~1-4) 棺の東側の左右に蓋環がそれぞれ2個つつ重ねて安置してあった。東の妻部側石に向かって右側には床面に環身が逆位の状態であり、その上に蓋が正常位で重ねてあった。又、向かって左側には蓋環が正常位であり、その上に環身が逆さに重ねてあった。左右の須恵器の間隔は約15cmある。これらの須恵器はただ単に副葬されていたというよりは枕の役割りを果たし遺骸の頭部を支えていたと考えられる。

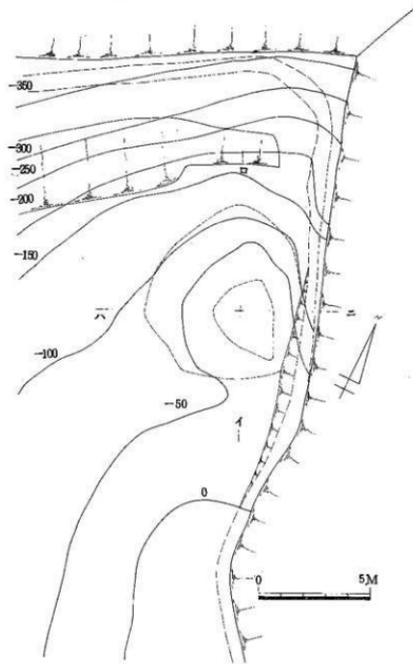
(第7図1-5)  
2) 刀子 棺内中央部東側石寄りにあった。全長12.6cm、刃長7cm、茎の長さ5.6cm刃幅は、中央部で0.9cm、厚みは3mm近くある。茎の幅は中央部で0.7~0.9cm、厚みは3.5mmを計る。茎の刃部寄りには柄の部分が遺存していたが、この材質は鹿角と思われる。柄の厚みは推定するところ1.8cm×2.1cm位である。刀子の出土位置は遺骸の右腕の先端付近と考えられる。

(第7図1-6)  
3) 鉄鏃 棺内南西角から出土。床面から約4cm厚いた状態で、刃先を棺外へ向けている。全長推定11.5cm、刃長8.3cm、刃幅は中央部で1.7cm、厚み2.5mm、茎長は3.2cm、厚みは、直径4mm前後で楕円形の断面を呈する。両側に逆刺のつく式のものである。

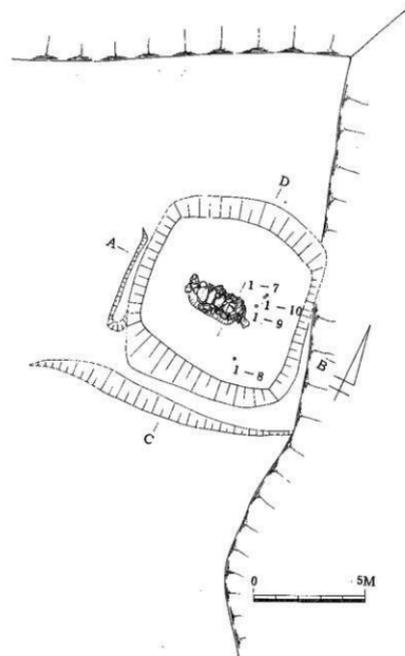
(第8図1-7~1-10)  
石棺外 1) 須恵器 石棺の北東部に蓋環が2個正常位で、環身が1個逆位で黒褐色の旧表土上に置いてあった。又、石棺の南東側には環身が1個正常位ですえられていた。



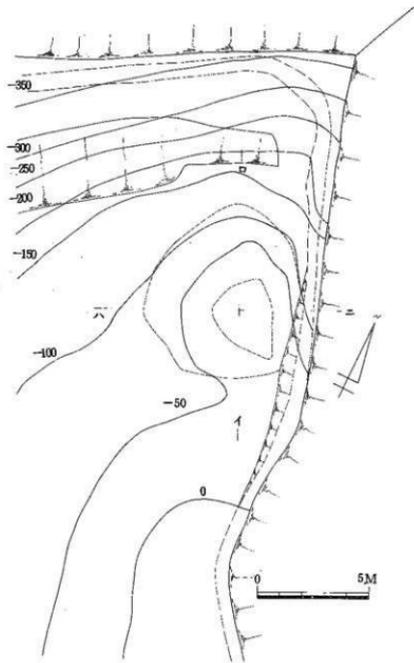
第4図 第1号墳 墳丘基部断面図



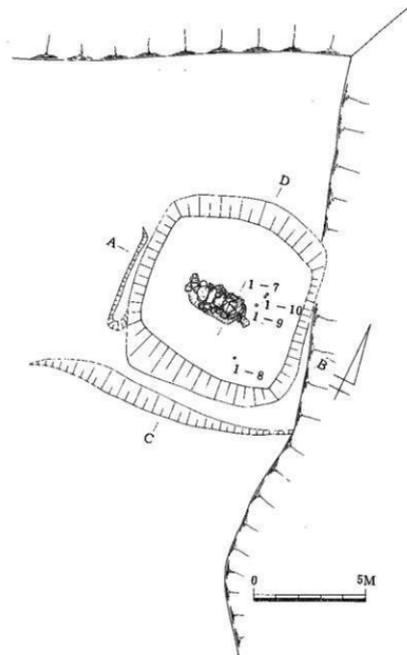
第2图 第1号坟堆丘外形实测图



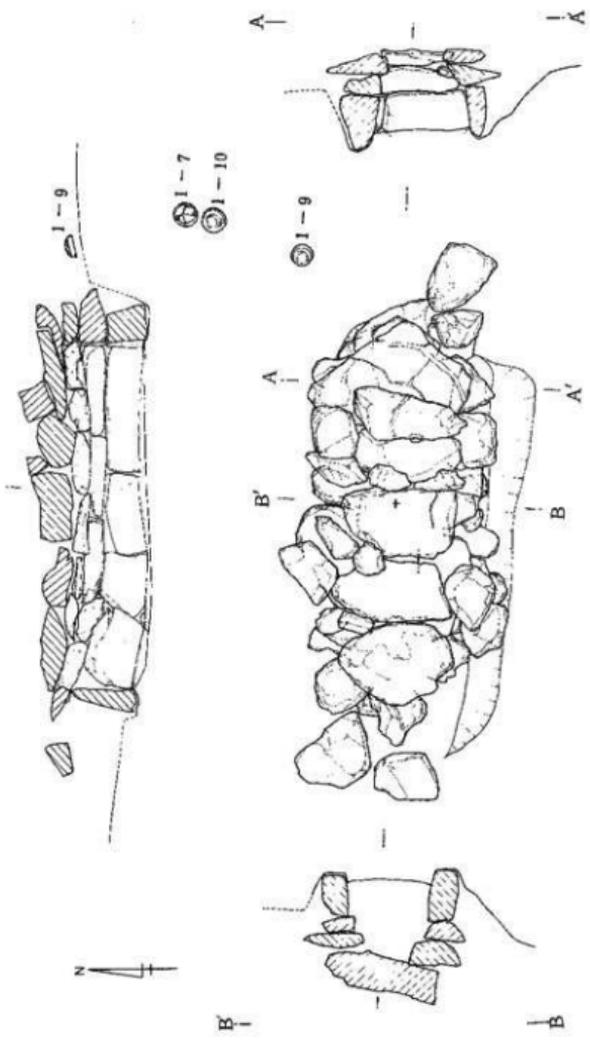
第3图 第1号坟堆丘基座实测图



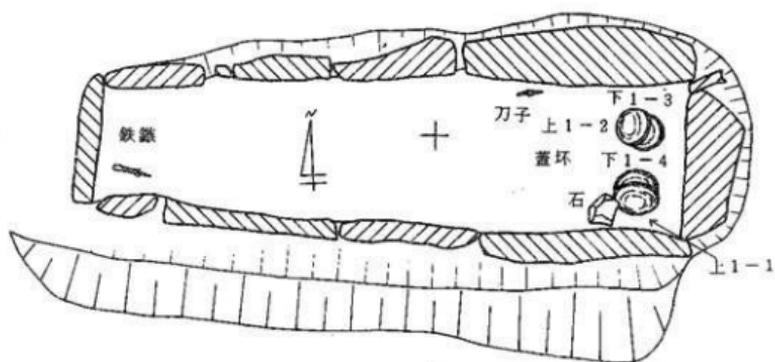
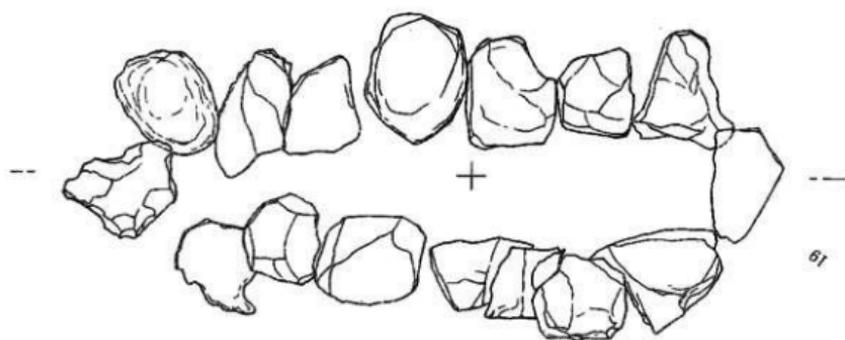
第 2 图 第 1 号堆筑丘外形实测图



第 3 图 第 1 号堆筑丘基座实测图



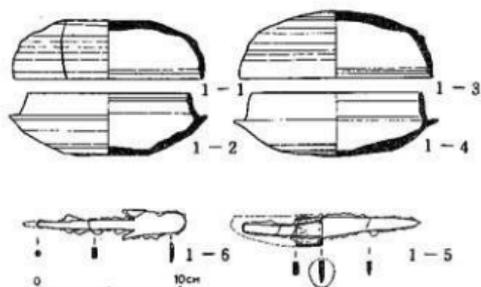
第5图 第1号堆石锥架平面图



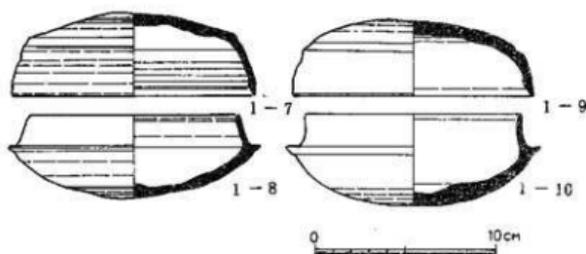
第6圖 第1号墳石棺平面图

上段 側石最上段配置図

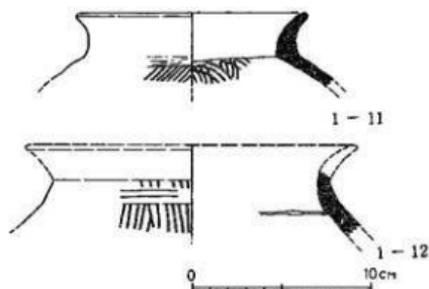
下段 床面及び副葬品配置図



第7図 第1号墳棺内出土遺物実測図



第8図 第1号墳棺外出土土器実測図(1)



第9図 第1号墳 棺外出土土器実測図(2)

の器表面には平行叩き目があり、裏面には同心円文を押圧している。口縁部の内外面は横ナデ調整が施されている。全体に灰色を呈し焼成はかたい。概して古墳時代後期のものであろう。

いずれも、土を盛って墳丘を築成する以前の段階のものであり恐らくは、古墳を構築する工程にあって溝を掘って墳丘の基礎を成した時点か、石棺をしつらえて遺骸を納めた時かいずれかの時点で何らかの儀礼が執り行なわれたのであろう。これらの須恵器は、恐らくその際儀礼で使用され、忌み汚れた

土器として、墳丘基盤に置かれ埋め込まれたのではないだろうか。

1-11は、石棺西側の溝中黒褐色土層中から出土したもので口縁径12.6cmを計る。小型壺の口縁部から胴上半部にかけての破片である。胴上半部の

2) 土師器 西側の溝中黒褐色土層中から数片出土。その内、1-12は小型壺の頸部から胴上半部にかけての小片である。胴上半部の器表面は刷毛目調整の後、部分的に横ナデ調整を施している。その内面は頸部以下をヘラで削り放さず全体に横ナデ調整を施していることが注意される。口縁の復元径は18cm余りであろう。

第2表 第1号墳出土須恵器蓋坏一覧

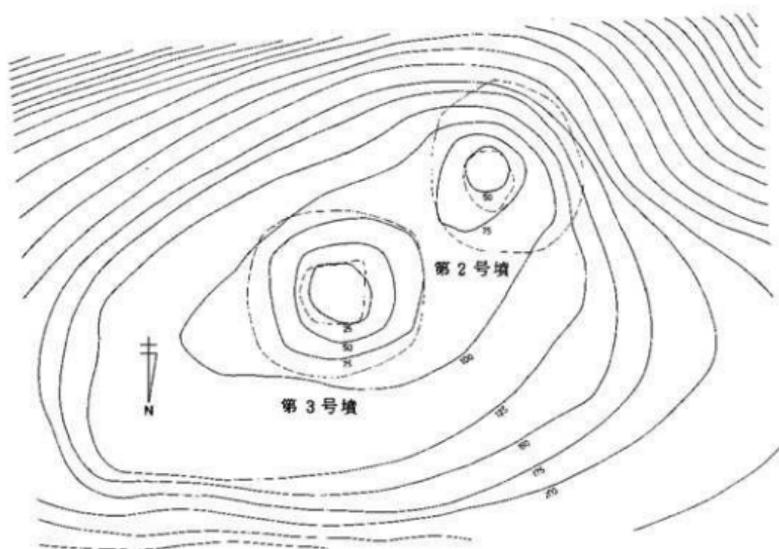
図版 番号	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	ロクロ の回転 方向	出土位置	注記 番号	セット 関係
1-1	坏蓋	13.2	4.20	良	良	灰色	右まわり	棺内東南角 1-4の上に重なる	7	セ ツ ト
1-2	坏身	11.4	4.40	"	"	"	"	棺内東北角 1-3の上に重なる	5	
1-3	坏蓋	13.6	4.80	"	"	"	"	同上 1-2の下、床面	6	セ ツ ト
1-4	坏身	11.9	4.50	"	"	"	"	棺内東南角 1-1の下、床面	8	
1-7	坏蓋	13.4	4.60	"	"	"	"	石棺北東部 旧表土上面	4	セ ツ ト
1-8	坏身	11.7	4.65	"	"	"	"	石棺南部 旧表土上面	1	
1-9	坏蓋	13.2	4.20	"	"	"	"	石棺北東部 旧表土上面	2	セ ツ ト
1-10	坏身	12.0	5.10	"	"	"	"	同上	3	

## 2. 第2号墳

墳丘の構造 測量したところ一辺9×10.5m、高さは東辺で0.5m余り西南部で3m近くを計る。全体としては、やや両側の斜面に張り出したかっこうである。

又、第3号墳とは、東北の角と第3号墳の西南の角とが近接している。調査の結果、墳丘は一辺10m、墳裾からの高さ約60cmを計る方墳で、北側と東側及び西側の一部に溝を穿ちその内側に0.3～0.6mほどの盛土ほどこしたものである。中心部は旧表土である黒褐色土が一様に遺存していたので、地山を掘り込んで主体部を形成した形跡はない。又、盛土中にも何ら変化はなかった。したがって本墳が果たして古墳であったかどうかは判断出来ない。しかし後述するように北溝堆積土から古墳時代後期の所産と思しき土師器片が大量に見られているので結論的には古墳であろうと推定するところである。

これらの土器片を包含していた溝であるが、北の溝の断面は逆台形で上端幅2.5m、下端幅0.9m、深さ0.6mを計る。内部の堆積土は上層が黒褐色土、中層が暗褐色土、下層がやしまった褐色土となっており、遺物は下層である褐色土層からのみ出土した。北側の溝は西部において自然消滅している。



第10图 第2号墳、3号墳实测图  
 上段 墳丘外形实测图  
 下段 墳丘基盤实测图



東側の溝は上端幅1.9m、下端幅1.0m、深さ0.24mを計る。この溝中からは、わずかに須恵器の蓋環の小片が発見されているのみで北側の溝とは全く様子が違う。

古墳の両側は浅い段があるがほとんど自然斜面と連続しており意識的に加工整形したものでどうか不明である。

盛土を形成している土層は、上層が砂っぽい黄褐色土で下層は旧表土の黒褐色土混りの黄褐色土である。上層からは、赤色顔料を塗彩した土師器の小片などがわずかに出土している。又旧表土である黒褐色土上面からは土師質の壺の底部が発見されている。

遺構 前述したとおり墳丘基盤はもとより盛土層中にも主体部は認められなかった

遺物 白磁碗(第12図中2-1)この碗は口径16.0cm、器高5.7cm、高台径7.0cmを計る。口縁部に幅1.3cmほどの玉縁を付ける。体部下半部はへら削りを施し底部は高さ0.6cmの高台を付けるもので体部の厚みは0.4cmを計る。底部の厚みは約1.0cm、内面見込み近くには断面三角形形状の沈圈線が一条まわり見込みを区画している。軸はややくすんだ灰色を呈し高台付近にまではかからず、体部内面には貫入が認められる。

破片は全部で4片あり1区の溝中の古墳中心部寄りの斜面から出土。黒色土層とその下層である褐色土層との界面から底部の破片が出土。口縁部の1片は褐色土層下部から出土し、口縁部の他の1片は黒色土層上面から出土した。いずれも大きな松の木の間根株周辺から発見されており原位置を動いている可能性が強く包含層もいずれの土層であるか確定出来ない。口縁部の2片は互に接合する。周囲をくまなく精査したが、4片以外には発見出来なかった。この種の白磁碗はおおむね西暦13世紀ごろに中国南宋から輸入されたものである。<sup>註7</sup>

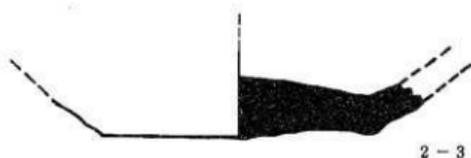
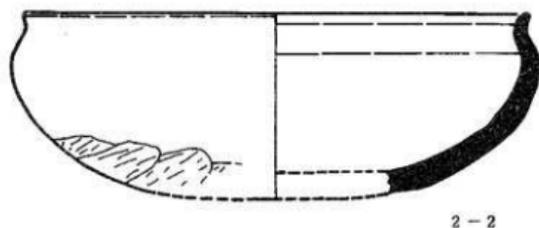
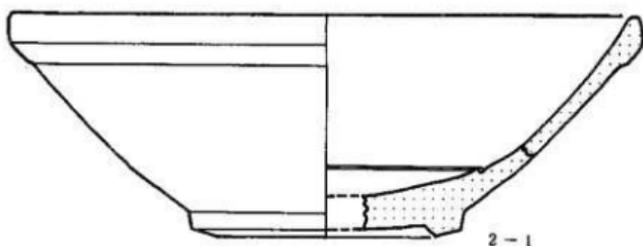
土師器碗(第12図中2-2)口径13cm、器高(推定)4.8cmを計る。口縁部は一度内反した後、その下位で胴部最大部を形成し底部へ向かう。底部は幅の広い平底となるようである。器表面は底部外面を除いて入念に横ナデされた後赤色顔料が塗彩されている。胴下半部から底部外面にかけてはへら切り調整が施されている。胎土はチ密で砂粒は殆んど含まれていない。

この種のものは少なくとも3個体以上が確認されており、その破片はいずれも北構中の堆積土の内第3層である。狭い範囲から集中して発見された割りに細かい破片となることが注意されるが、恐らく当初は墳丘上に置いてあったものが後に溝へ落ち込んで割れたものであろう。

土師器壺底(第12図中2-3)壺の底部の破片で上げ底形式である。底部直径7cm、底部中心の厚み1.6cm、胴部立ち上がりの部分の厚み1.0cmを計る。直径1ミリ前後の砂粒

を多く含む胎土は粗く焼成も悪い。胴部の立ち上がりは少し外反したのち最大部へ続くようである。3区の墳丘盛土下の旧表土と思われる黒色土と地山である黄色粘性土との間から出土したので本墳とは無関係である。

その他、東溝の暗褐色土層中から須恵器の蓋坯の坏蓋の小片が出土している。恐らく古墳時代後期のものであろう。又、墳丘盛土の比較的浅い部分から土師器の壺の胴部の細片が発見されており中には赤色顔料を彩色したものもある。さらに、北溝底面に堆積する褐色土層中には、古式土師器の口縁部や胴部の破片が発見されている。



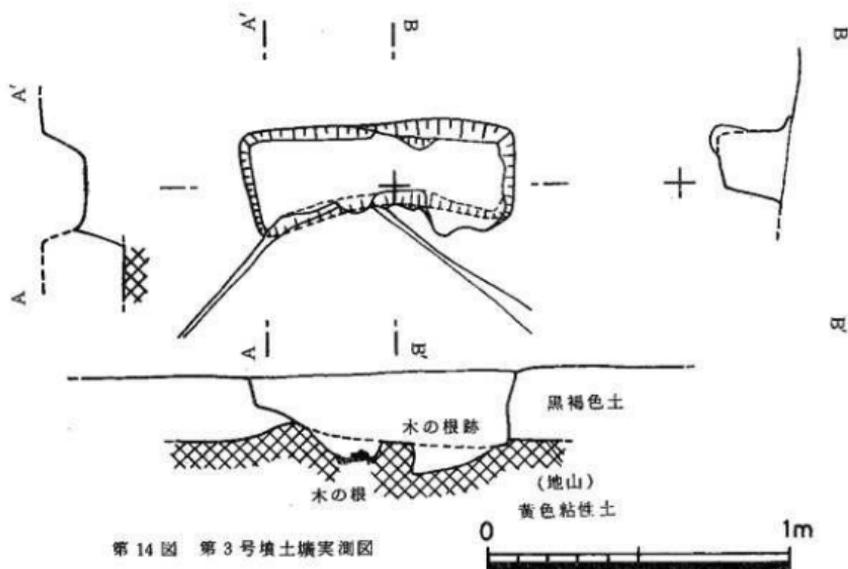
第12図 第2号墳出土土器実測図

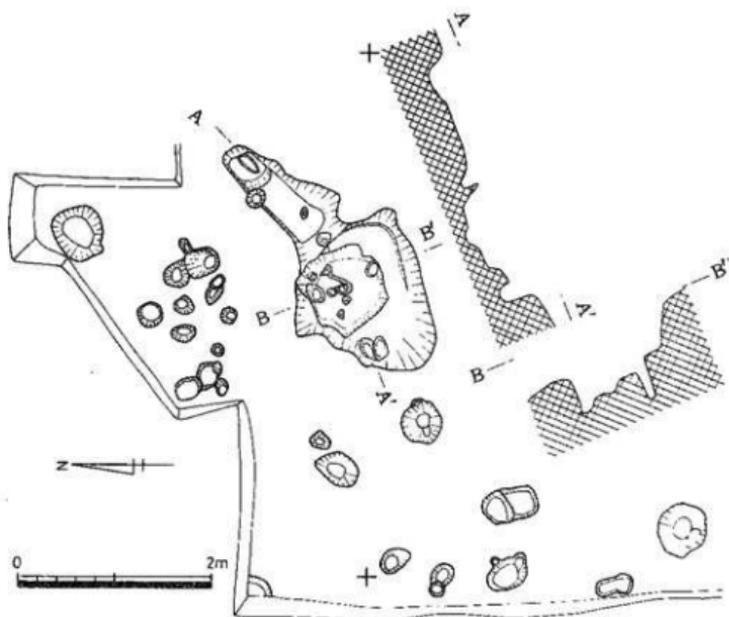
### 3. 第3号墳

**墳丘の構造** 測量したところ一辺約10m、高さ約1mの方墳と思われた。調査の結果、周囲の地山を削って内側に一辺10mの略正方形の台地を削り出し中央部に小規模の土壇を設けたものであった。盛土は高さ40cmほどで褐色砂質土～暗黄褐色土である。地山の表層である黒褐色土は墳丘中央部においてさしわたし5.8mほど遺存している。

**遺構** 主体部と思われるものは、墳丘中央部直下であり、長さ0.9m、幅35cm、深さ20～25cmほどの極めて小規模の長方形土壇である。土壇底面は中央部と両部において木の根の痕跡があり凹んでいる。土壇は盛土上層から掘り込まれその底部はわずかに地山を掘り凹めている。土壇内部の土は腐食土で木の根が入り込んでいることもあって古墳に関係した施設かどうかにはわかに断定出来ないが、長方形を呈し、当初の底部も一部遺存していることから、一応これを土壇とみなすことが出来る。しかし、通常のものよりも小規模であることから、埋葬施設以外の掘り方と考えることも出来る。内部には土器など副葬品は全く無かった。

一方、古墳の北西部裾には柱穴が28穴確認された。直径10～60cmと大小の差はあるが、





第15図 第3号墳北西部柱穴群及び土壌実測図

いずれも深さ10～15cmと浅く相互の企画性もないので建物の獨立柱とは考え難い。しかし、北西部のみに集中していることは何らかの意味があるのであり、深さも当時の旧表土上面からであれば数10cmは深さが増すものと思われるので不定形ながらも簡単な施設があったのであろう。

これら柱穴群からさらに墳丘に寄った地点には、さしわたし1.4m×1.6m、深さ30cm近くの土壌が認められその内側法面や床面に柱穴が掘り回められていた。柱穴は11穴を数えるがその内、5つの穴は中央部で十字に交差するようである。この土壌の北東部には長さ1.4m、幅40cmの長方形土壌が隣接しているが、深さは20cm近くと浅いものである。これらの土壌が墓に関係したものかどうか内部から遺物が出土していないのでその性格を極めることは困難である。

**遺物** 北西の柱穴群を覆う暗褐色土層中に土師器の細片が認められたが、時期などは不明である。

## Ⅳ 小 結

### 第 1 号 墳

#### 遺構の検討

この石棺は、近隣の論田第 2 号墳で検出された組み合わせ石棺と極めて類似するものである。特に蓋石の接ぎ目の上に角石を配する手法はそっくりである<sup>註 2</sup>。しかし、石棺の中央部から東部にかけては 3 段の小口積みとなっており、古墳時代後期の古墳に採用されている横穴式石室の構築方法の影響するものであることが注意される。

棺内の出土遺物の内、枕に使用されたと思われる須恵器蓋環や棺外の蓋環の示す時期は山陰地方でいうところの第Ⅲ期の前半に属するものと考えられる<sup>註 6</sup>。それは、蓋の口唇部断面がのみ刃状を残していることによる。

副葬品は須恵器の外に鉄器が認められたことは、被葬者がこの地域の有力者であったことの証左であろう。

本墳で検出された石棺の形式は、他に類似を見ないものであろう。山本清先生は、山陰地方の石棺を大きく 4 つに分類しておられる<sup>註 5</sup>。第 1 号墳の場合は、基本的にはそのうちの I A 類に属するものである。しかし、山本論文には「なお壁面の一部に小口積みの手法を用いるなど、やや異態のものも便宜一括して B' とする」と記述されているので I B' となる。しかし、もともと B 類は幅、高さ 1 m 程度ないし、それ以上のものという区分であり（要するに、A 類の様に細長くはなく、幅、高さ共に広い空間をもったものとして分類されているので）厳密に言えば、本古墳の石棺に類するものを、将来 I A 類として新たに区別する必要があるかと思われる。

#### < 石棺の構築順序の検討 >

##### 第 1 の両期 < 地鎮祭が執り行なわれたと思われる >

##### 第 1 段階 < 掘り方を設ける >

掘り方の線が明瞭に認められたのは、石棺の両側である。長さ 2.4 m にわたって旧表土を深さ 30 cm ほど掘り込んでいる。この段は石棺の際でさらに 10 cm ほど落ち込んでいる。北側と東西両側の掘り方の線は、旧表土面では明らかにすることは出来なかったが、旧表土下の黄色粘性土（地山）中で石棺のすぐ際の掘り方が確認できた。それによると、いずれも石棺から 10 cm ほどの間隔をおいて掘り込まれている。遺存する深さは 15 cm ほどである。

##### 第 2 段階 < 石棺の最下段の側石を設ける >

最下段の石を取り除いたところ、すぐに地山が確認できたところから、これらの側石は、

掘り方に深く掘り込んだものではなく、勢いをつけて上から数回振り落として固定したものである。石棺東部は細長く、角のある石の小口平担面をうまく利用し、コの字型に配列している。西部短辺の石とその両側に続く長辺の石は、比較的平坦な石を立てかけた程度であった。

#### 第3段階 <中段目の側石を重ねる>

石棺東部は、細長くて角のある石を最下段の側石に密着させて積み重ねているが、西部では、最下段の平坦な石がそのまま2段目の高さと同じく立ち上がっているので中段の石は存在しない。

#### 第4段階 <最上段の側石を積み重ねる>

角のあるというよりは、やや丸みのある石が目立つ。最下段と中段のように密着した状態で、ほとんど隙間なく積んだものではなく、むしろ、中段の石との間に小石を詰めたり、土を詰めながら、石の上面を水平にそろえることが主目的のようである。それは、とりもなおさず蓋石をその上に置く為の準備段階であったと思われる。

#### 第2の画期 <本葬儀礼が執り行なわれ、遺骸をはじめ副葬品がおさめられたと考えられる>

#### 第5段階 <蓋石を置く>

蓋石は計5枚である。厚み10cmから20cmほどの扁平な石を東端の石から順次重ねて斜めにかぶせている。両端の石は外の方へ向けて三角形を呈しているのが注目される。

第3の画期 <石棺の設置が完了した段階で、再び儀式が執り行なわれた。その際使用された土器が、棺外旧表土上に置かれた>

#### 第6段階 <土を蓋る>

第5段階までの間に周囲に溝が掘られ、その部分の土や溝より外側の旧表土と地山の土を削って墳丘基盤の上に平均40cmほど土が盛られる。

#### <出土遺物の検討>

まず、棺内より出土の須恵器蓋坏であるが、より幅の広い短壁（東壁）に近く、左右2個づつ重ねて置いてあった。石棺内における須恵器のこのような配置の仕方は、鳥取県西伯郡東郷町宮内、中のうね所在のもの、倉吉市横田町矢戸所在の横谷2号墳で確認されている。<sup>注9</sup> 同じ倉吉市の服部47-48-49-50号の各古墳では木棺の中に須恵器蓋坏がセットで2合、短辺側に置いてあった。<sup>注10</sup> この須恵器の示す時期はⅡ期頃であるといわれている。いずれも遺骸の枕に使用されたものと考えられている。本石棺の場合、同様の用途に供されたものであろうことは、疑いないところである。

次に、棺外出土の須恵器について考えてみよう。須恵器はいずれも蓋環で、石棺から南方へ3m離れたところで1個、石棺に隣接した東北部において3個発見されている。これらは、旧表土となる黒褐色土上面に置かれてあり、盛土中になく、盛土外の溝部分からも発見されなかった。明らかに墳丘盛土築成以前であるので、墳丘基盤形成の段階で、例えば本葬が終わり石棺の蓋がとじられた段階で使用された須恵器が忌み汚れたものとしてそのまま旧表土上に置かれたものと考えられる。

## 第2号墳

### 遺物の検討

#### ①土師器碗

この種の土師器は、出雲市の天神遺跡のSDOI上層の出土品<sup>註11</sup>、八束郡八雲村土井13号墳の墳丘南西部裾からの出土品<sup>註12</sup>、さらには、瀬野郡仁摩町坂麩遺跡の採集品<sup>註13</sup>に類例が認められる。いずれも体部下半部から底部をへら切り調整し、体部上半部から内面にかけては横ナデ調整を施している。その示す時期は、天神遺跡の場合、第Ⅲ期の須恵器と伴出していることからおおむね6世紀の後半頃のものと考えられている。これらのことから本墳の場合も、これらの遺跡と同じ頃の築成と考えられる。

#### ②白磁碗

比較的大きい玉縁口縁や、内面の見込み近くに沈圈線を入れ、軸も高合近くには及ばないなどの特徴から、滋賀県大津市比叡山採集品や岡山県山陽町愛宕遺跡出土の白磁碗に類似している。この種の白磁碗は当時、中国南宋の民窯で焼成されたもので、それが鎌倉時代の13世紀を中心とした時期に、交易品として日本内地に輸入されたものといわれている。

亀井明德氏は、宋代の輸入陶磁について大きく3期に区分されているが<sup>註14</sup>、第2号墳出土の白磁碗は、前述のとおり西暦13世紀頃のものとしてよいので、亀井氏分類の内、第3期の頃に該当するものと思われる。

本墳出土の白磁碗は、この時期に北部九州沿岸から何らかの経路をへて出雲地方へもたらされたと思われる。

それでは、当地で、いかなる人がこれを入手したのであろうか。日本における白磁碗の使われ方は、概して経塚の経筒の蓋に使用されることが多いと聞く。本墳の場合、後世、古墳の墳丘を再使用したことが考えられるが、その再使用の目的を考えた場合、経塚とも断定できず、かといって、中世における墳墓（火葬墓など）と決めつける証拠もない。又松江市乃木福富町の松本修法壇跡<sup>註15</sup>をはじめ全国的に検証されている宗教上の儀式にもとづ

<sup>注8</sup>く墳跡の可能性も強いが積極的に認めうる遺構は検出されていない。しかし、白磁碗はどこでも出土するような什器とは考え難いので、特定の人によってこの古墳の墳丘を利用して祭儀が執り行なわれたのではないかと憶測される。

### 第3号墳について

本墳は墳丘中央部に小規模の土壌を有するものの埋葬施設と断定できず出土品も皆無であるので、必ずしも古墳とは断定出来ない。

注1 松江市教育委員会「松江市の埋蔵文化財」1980年

注2 松江市教育委員会「論田遺跡発掘調査報告」1980年

注3 松江市教育委員会「論田横穴群発掘調査報告」1980年

注4 島根県教育委員会「島根県埋蔵文化財調査報告書第Ⅷ集」昭和52年3月

注5 島根大学考古学研究会「十王免横穴群」昭和43年

岡崎雄二郎「十王免横穴群」（『八雲立つ風土記の丘文化財』所収）島根県教育委員会編 昭和50年

注6 山本清「山陰の須臾器」（『山陰古墳文化の研究』所収）昭和46年

注7 東京国立博物館編「日本出土の中国陶磁」

注8 山本清「山陰の石棺についてⅢ」（『山陰古墳文化の研究』所収）1970年

注9 名越勉「倉吉市史 原始・古代」昭和48年11月

注10 倉吉市教育委員会「倉吉市服部遺跡発掘調査報告 遺構篇」1973年

注11 出雲市教育委員会「天神遺跡」1977年

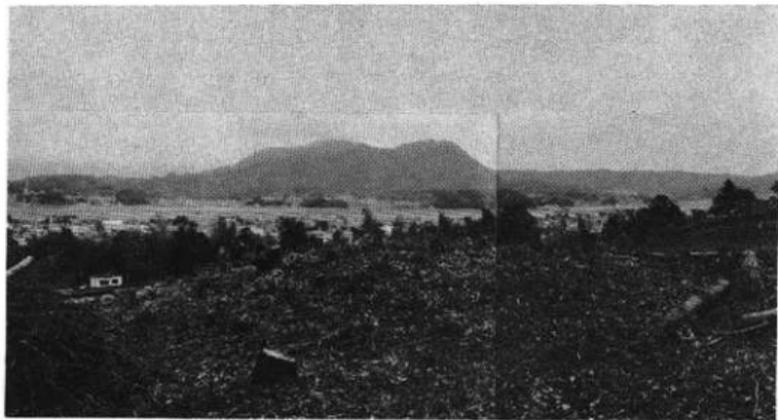
注12 柳浦俊一・内田律雄「八雲村土井13号墳の発掘」（『季刊文化財35号』所収）昭和54年3月

注13 注10、11と共に島根県教育委員会文化課 松本岩雄氏の御教示による。

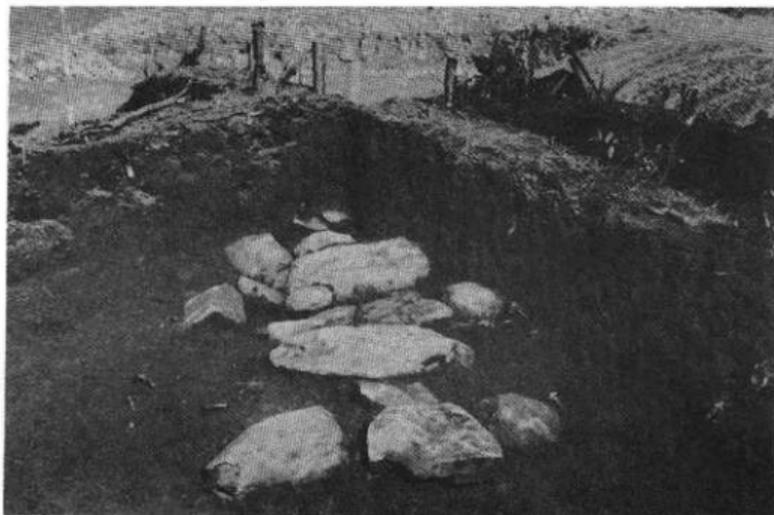
注14 龜井明德「宋代の輸出陶磁 日本——出土品を中心として——」（『世界陶磁全集12 宋』所収）昭和52年 小学館

注15 近藤正、横山純夫「松江・松本修法墳跡」（島根県埋蔵文化財調査報告書第Ⅲ集収所）1971年

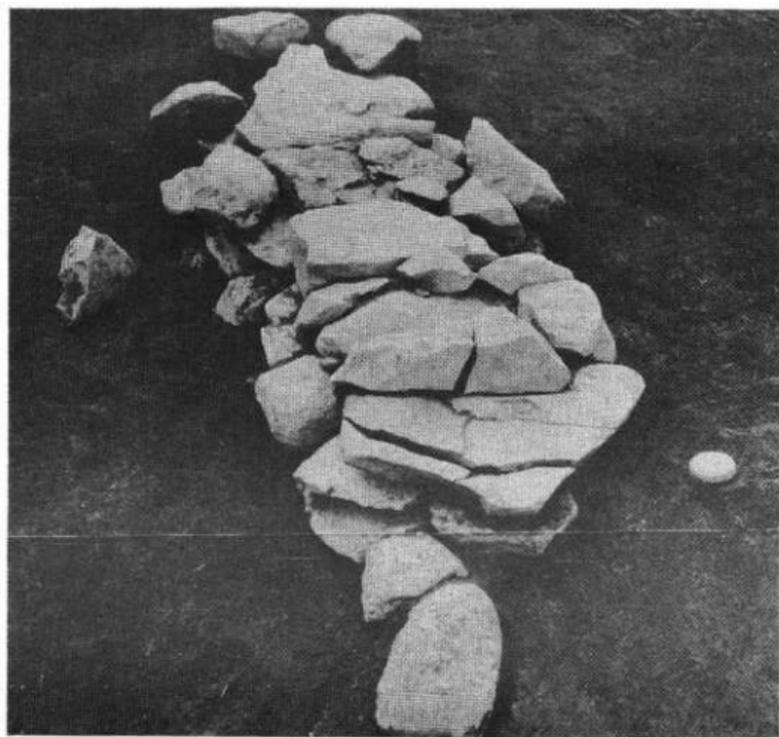
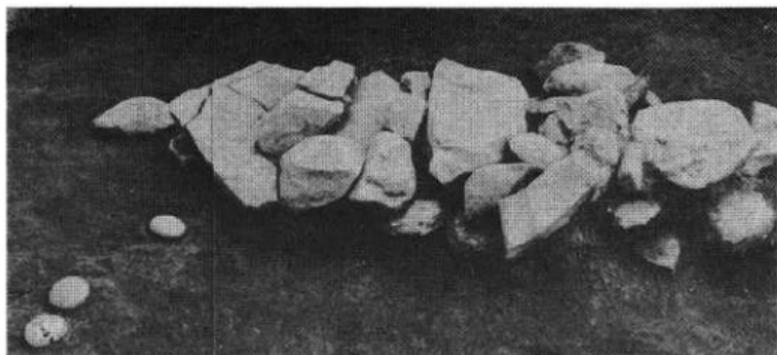
注16 佐野大和「横浜市金沢区富岡町における修法墳遺跡の調査」（横浜市文化財調査報告書 第四輯



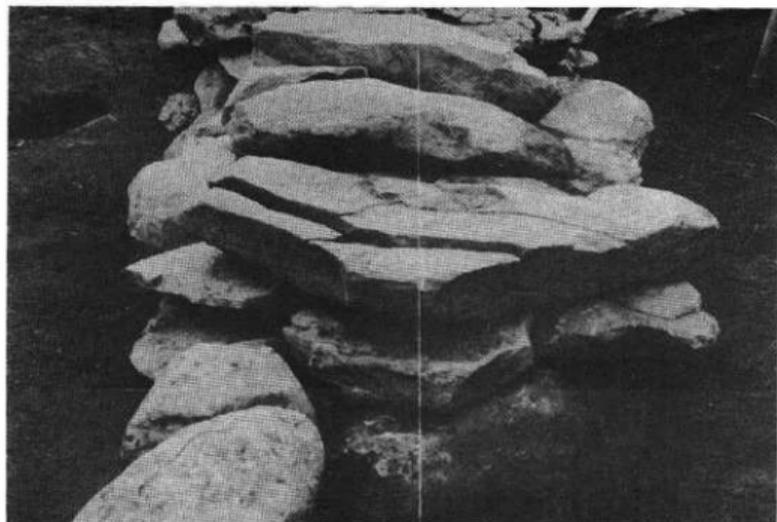
喰ヶ谷第1号墳近景（南西より）



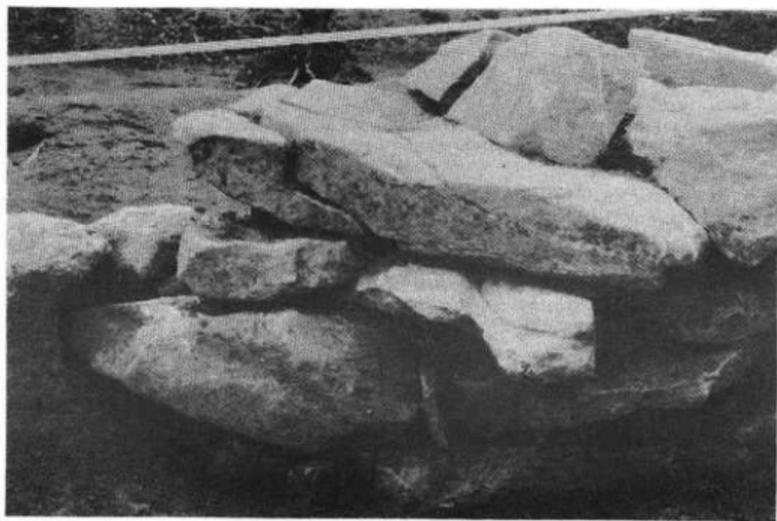
石棺の上部検出状況



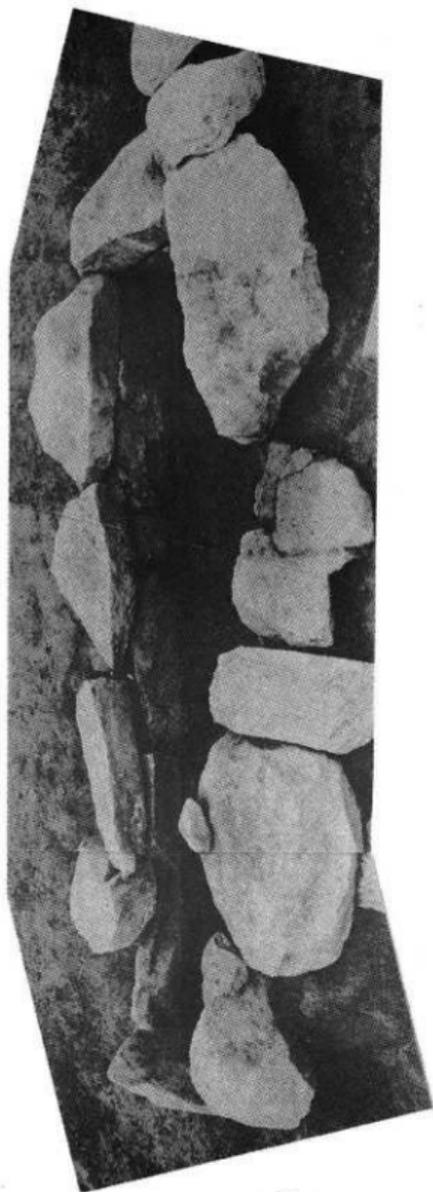
天井石と棺外須恵器の出土状況



天井石の組み合わせ状況



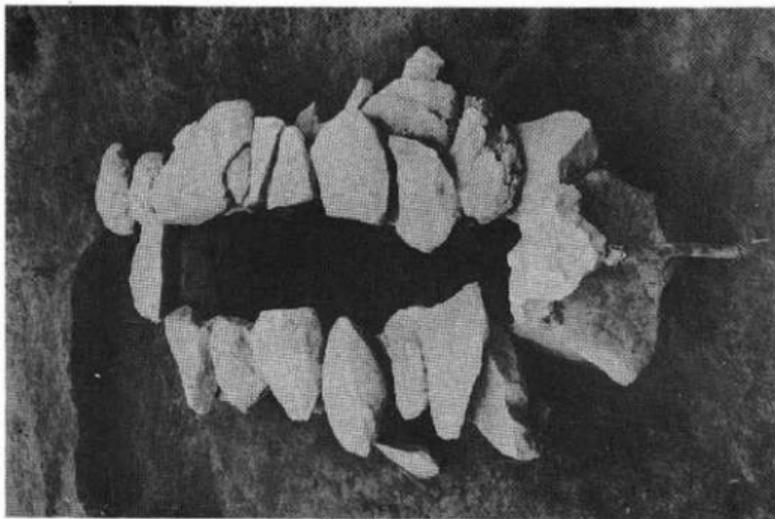
天井石と側石の組み合わせ状況 —— 東北の角部分 ——



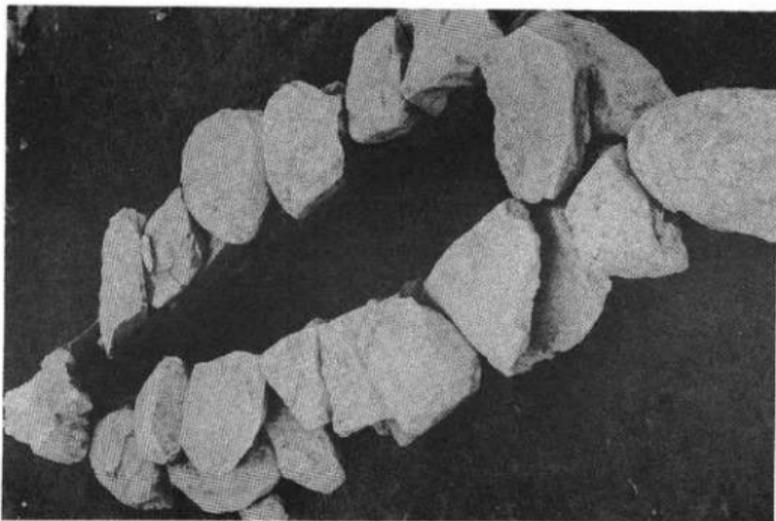
—— 北壁をみる ——  
最上段の側石除去後の壁石



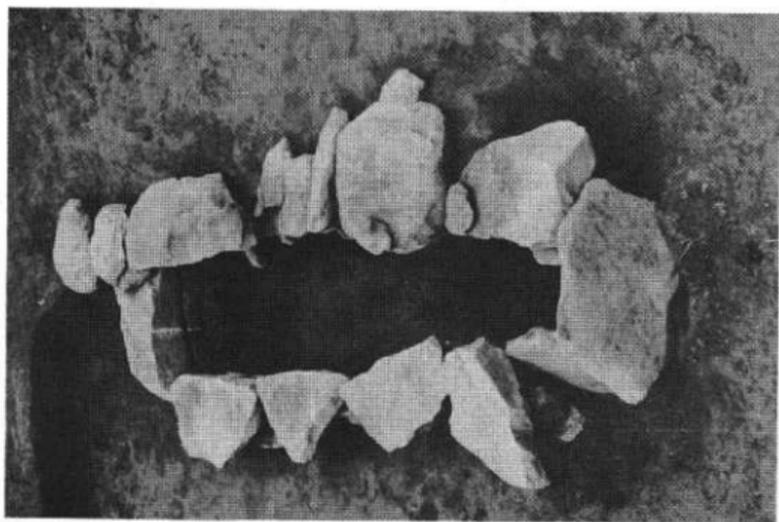
最上段の御石除去後の壁石 —— 兩壁をみる ——



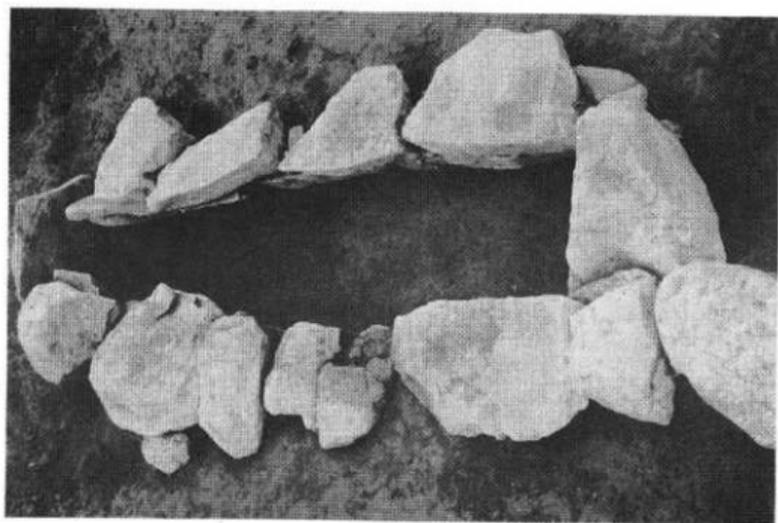
天井石除去後最上段の側石配置状況 — 東をみる —



同 上 — 西をみる —



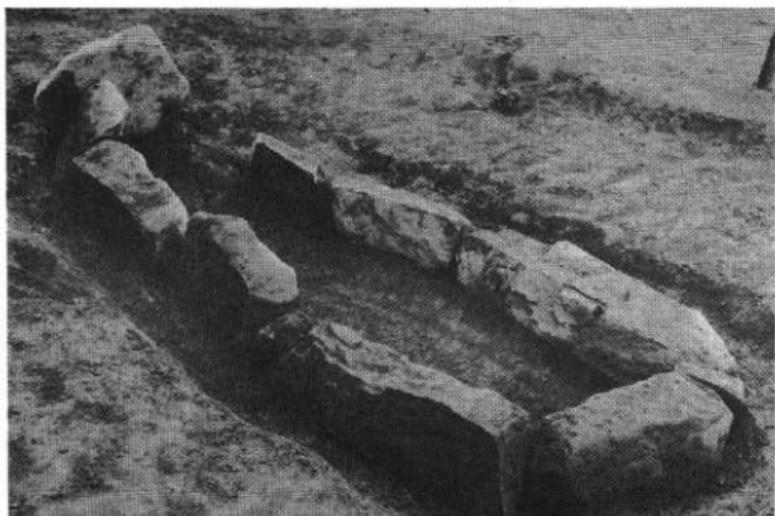
中段目側石の配置状況 — 東をみる —



同 上 — 西をみる —



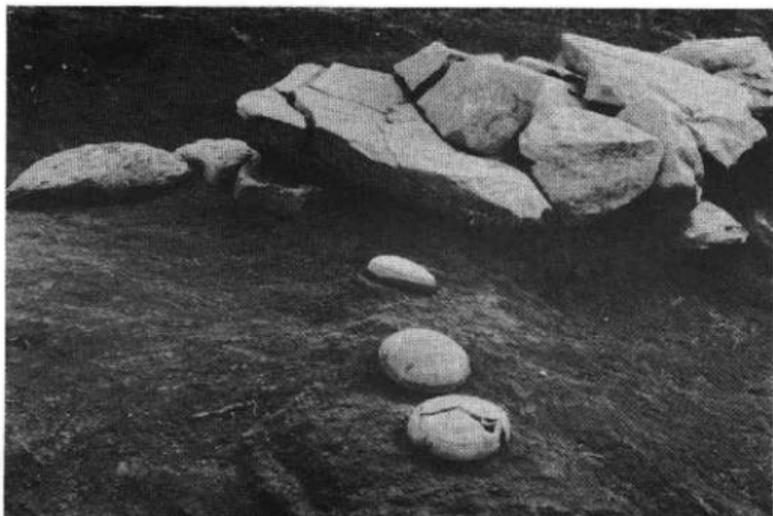
最下段の側石配置状況 — 東北部をみる —



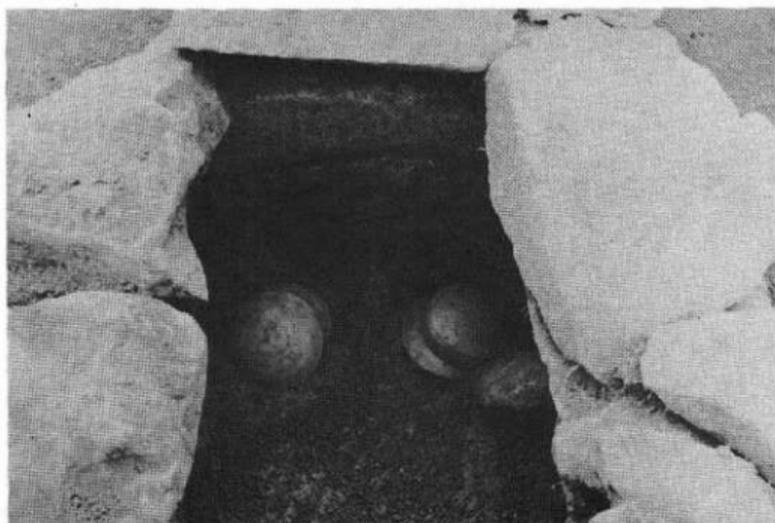
同 上 — 西北部をみる —



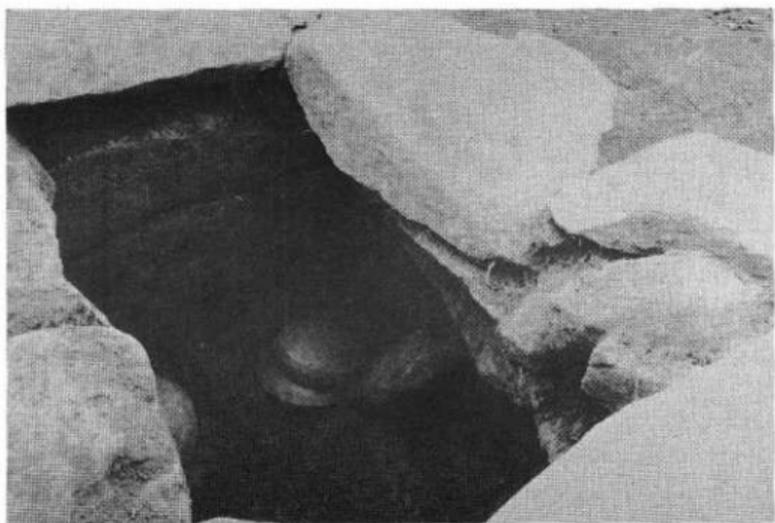
側石除去後の土城掘り方 — 東をみる —



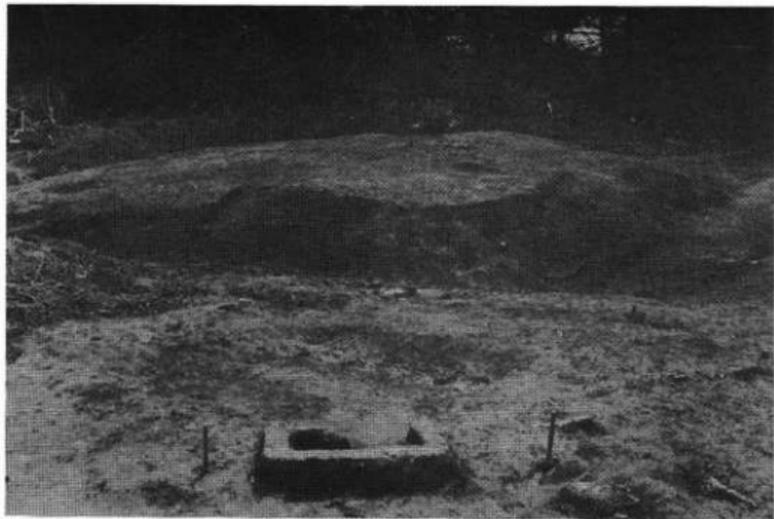
棺外須恵器の出土状況 — 石棺東北部 —



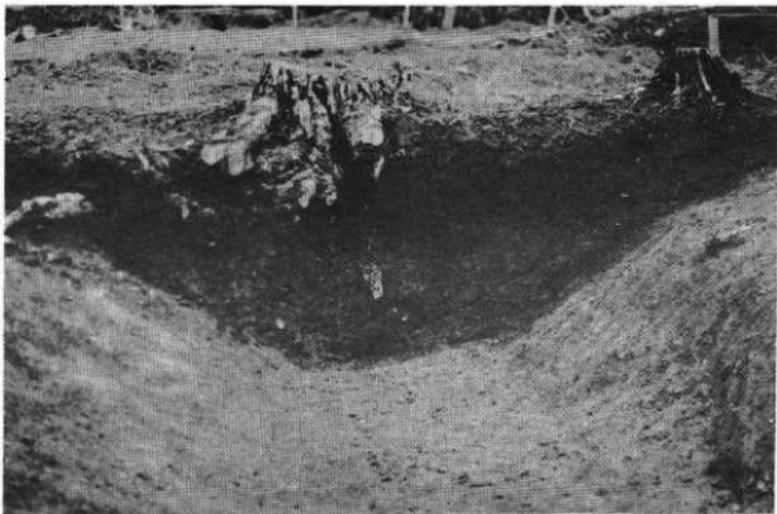
枕に使用された須恵器蓋環



同 上



第2号墳 墳丘基盤（手前は第3号墳の土積）



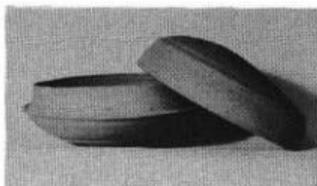
第2号墳 北溝堆積土の状況



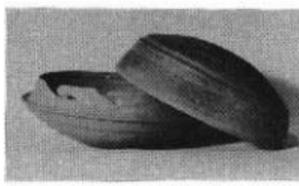
第2号墳北溝（西より）



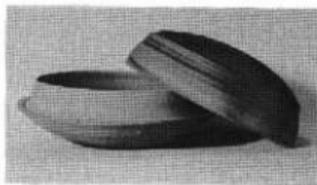
第3号墳 西北部裾の土壌と柱穴群



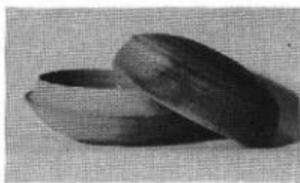
1-8 1-9



1-10 1-7



1-2 1-3



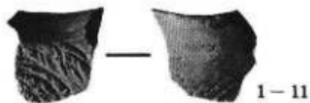
1-4 1-1



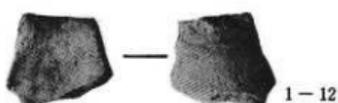
1-5



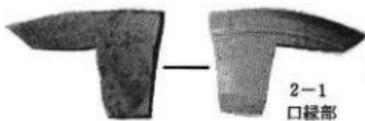
1-6



1-11



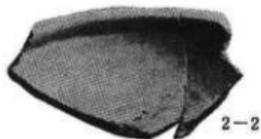
1-12



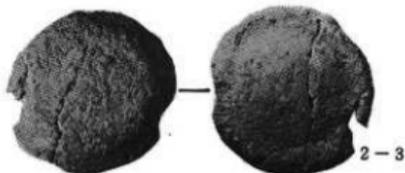
2-1  
口縁部



2-1  
底部



2-2



2-3